

豊山学報・第六六号  
弘法大師御生誕千二百五十年  
記念特別号 抜刷  
令和五年三月発行  
真言宗豊山派総合研究院

# 大使メガステネース派遣の時期について

田中純男(海量)

## 大使メガステネース派遣の時期について

田中純男（海量）

はじめに

前論文「大使メガステネース派遣前史」<sup>〔1〕</sup>では、メガステネースがセレウコスの大使としてチャンドラグプタのもとに派遣されるにいたった経緯を、アレクサンドロスの東征を中心に当時の歴史的状况をもとに概観したが、彼自身については資料が乏しいため推測することはなかった。しかし乏しいながらも何かしらの手掛かりがあれば、ある程度の想定も可能であろうし、派遣の時期についても通説とは異なる見解もあり、改めてここで視点を換え、歴史的政治的状况を戦象を用いた戦いに主に焦点をあてて考察することにした。

### 一 メガステネースについての言及

彼はイオニア出身のギリシア人であるといわれる。イオニアはアテネを本市とする入植地で、ミレトスを中心として発展した地方で、アテネからエーゲ海を東方に越えた小アジアの沿岸に位置する。言語はイオニア方

言と呼ばれ、本来のギリシア語（アッティカ方言）の特徴をよく残しているといわれ、アレクサンドロス時代の共通語といわれる古代ギリシア語コイネ（アッティカ方言を基とする）とは趣を異にしていたようである。<sup>(2)</sup>アレクサンドロスがインドから兵を西に向けてから、軍隊の一部はインダスの河口から海路西へ乗りだすが、そのときの提督であったネアルコスが航海記を残した。それを基にアリアノスは『インド誌』の一部に沿岸地方の風俗を書き加えたが、ネアルコスの原文はコイネ語であったものを古雅なイオニア方言に改めたという。<sup>(4)</sup>

メガステネースがイオニア方言を用いたという言及はないが、彼の前の時代の歴史家ヘロドトス（四八五頃〜四二五頃）の例をみると、イオニアの南方に位置するカリヤ地方のハリカルナッソス出身であるが、以前からイオニア文化の影響下にあつて、ヘロドトスの時代にはイオニア方言が公用語となつていたといわれ、<sup>(5)</sup>また彼より約五〇年後に出たクテシアス（四四〇頃生）は『ペルシア史／インド誌』を著わしたが、小アジアのクニドス出身の医者でもあつたが、イオニア方言を使用したという。<sup>(6)</sup>メガステネースはアレクサンドロスとほぼ同時代と考えれば、クテシアスの約一〇〇年後となり、やはりイオニア語文化圏の中心に存在していたといえよう。さらにいえば、彼らの後を追つて『インド誌』を著わしたともいえよう。

メガステネースに関して最初に言及されるのが前一世紀のストラボンによるものである。メガステネースはチャンドラグプタのもとに使節として訪れた、と名は挙げられているものの詳しい状況は分らない。<sup>(7)</sup>また別の箇所では、ストラボンはペルシア東部の地理を述べるところでインダス地方に言及し、ここはもとペルシア領であったが、のちにアレクサンドロスが支配した。しかしセレウコスがチャンドラグプタとの交渉で、この地を婚姻と戦象五〇〇頭との引きかえに明け渡してしまった、と記している。<sup>(8)</sup>二人の交渉について語っているが、この間に誰が介在したかは関心外である。

ユスティヌス（二〜三世紀）の記述も同様であり、セレウコスはチャンドラグプタと和議を結んでバビロンへ

帰ったとする。この記述はローマの歴史家ポンペイウス・トログス（前一世紀）の著作からの抜粋であるとい<sup>(9)</sup>う。プルタルコス（一世紀）によるアレクサンドロス伝にもこの和議の話が挿入されている。<sup>(10)</sup> 二世紀のアリアノス（アリアン）は「メガステネースはアラコシア太守シビュルティオスと生活をともにした人であつて、インド人の王サンドラコットスのもとにしばしば訪れたことを、みずから語っている人物である」と述べている。<sup>(11)</sup> また『インド誌』では「けだし彼はインド人の大王サンドロコットス——ポロスよりは偉大なこの王の側近にあつたと、みずから語っている」とも述べている。<sup>(12)</sup>

前一世紀のストラボンの記述ではセレウコスとチャンドラグプタとが和議を結んだとあり、またチャンドラグプタのもとにメガステネースが使節として訪れたとあつたが、この三者の関係は明確ではなかつた。しかし二世紀のアリアノスにいたつて、メガステネースはアラコシアの太守シビュルティオスのもとにいて、そこからチャンドラグプタのもとに大使として訪れたとされ、シビュルティオスはセレウコスのもとの太守であるので、シリア王セレウコス、アラコシア太守シビュルティオス、インド王チャンドラグプタ、大使メガステネースの四者が同時代の人物として認識されることとなつた。

プリニウス（一世紀、政治家、博物学者）の『博物誌』にはインド全体にわたる部族、地理、距離が細かく記されているが、アレクサンドロスが進んだヒュバシス川まではアレクサンドロス時代の記録は実際とよく合致しているとしているが、その先のインドの地理についてはセレウコスの進攻時の記録によつて確かめられるとし、ガンジス河の河口にいたるまでの諸都市間の距離を列挙している。セレウコス時代の記録が何であるか分らないが、少なくともプリニウスの時代にはセレウコスはアレクサンドロスより深く進攻したと認識されていたようである。<sup>(13)</sup> また同じく『博物誌』には一世紀ローマの政治家、哲学者のセネカによるとして、インドの河川を六〇、国の数を一一八としているが、これらの数はアリアノスがメガステネースの記述によるとして挙げる河

川五八、種族の数一一八と等しい。<sup>(14)</sup>

メガステネースがチャンドラグプタの宮廷に赴き、そこでの見聞を『インド誌』として著わしたのは知られていて、原本も残っていたのであろう。そしてこれらの記述からセレウコスとチャンドラグプタとの戦い、和議、メガステネースの派遣、太守シビュルティオスの存在が事実として歴史家たちに伝えられていたことも判明する。

二、三世紀のクレメンスは『インド誌』を著わしたメガステネースをセレウコスとともに生きた (lived with) と述べている。<sup>(15)</sup> この時代になるとメガステネースは和議のあとに派遣されたとの歴史認識が共有されていたのであろうか。その時期として、チャンドラグプタの治世が二八八年までであるから、三〇二年から二八八年までとなるという見解が挙げられている。<sup>(16)</sup> 三〇二年とはイプソスの戦いが始まるころである(後述)。

## 二. ポロスとチャンドラグプタ

アリアノスの『インド誌』ではポロスとチャンドラグプタが並記され、メガステネースはチャンドラグプタの方が偉大であると述べているとされて<sup>(17)</sup>、したがってそのときはポロスがまだ健在であつたことになる。しかし原文では「ポロスはチャンドラグプタより偉大」と読めるので、<sup>(18)</sup> チャンドラグプタの支配がまだ十分に確立されていない時期とも考えられる。そうであると、ポロスの死は三一八年であるのでメガステネースのインド訪問はそれ以前となる。しかし原文の文章は崩れたもので、「チャンドラグプタはポロスより偉大」と読むべきとする見解や、さらにチャンドラグプタとポロスを訪れたのは別々の時期と考えるべきとか、メガステネースはセレウコスと同時代であるので、アレクサンドロスとも関係があつてその陣営に属していたともいい、推

測はさまざまである。<sup>(19)</sup>

右に述べた紀元前後の歴史家たちの記録から判断すると、セレウコスはいンドに進攻したが、いンドの大軍と対峙しやむなく引きかえす、そこで和議を結び戦象五〇〇頭を譲りうけたという点が伝承の核のようである。これはアレクサンドロスのいンド進攻をなぞったような話である。両者ともいンド攻略には失敗したが、アレクサンドロスの場合はポロスという偉大ないンドの王を味方につけることができた。セレウコスの場合はチャンドラグプタより五〇〇頭という強大な戦象部隊をえることができた。さらにポロスの東方の国にはポロスはるかに凌ぐ軍隊をもつ国が存在するという情報もあつた。<sup>(20)</sup> その国の偉大さは戦象の数によつて端的に表現される。「彼の地の住民は他のどこのいンド人よりも、はるかに多くの戦象を擁していて、しかもそれらの象は大ききにかけても、勇敢さという点でも、最高だという評判」であつた。<sup>(21)</sup> ポロスの所有する二〇〇頭よりはるかに多くの戦象をもつ東の国いンドからセレウコスが獲得した五〇〇頭とは、いンド進攻は果たせなかつたものの、アレクサンドロスを十分に凌駕する戦果をえたことになる。

アレクサンドロスがいンドの国情を知りえた状況について、『東征記』の訳者は「おそらく当時の北いンドの活発な往来、文物の交流からみてマガダ王国、ガンゲス川<sup>(マヤ)</sup>についての情報は、当時すでにかなりの程度まで得られていたかと思われる」と推測している。<sup>(22)</sup> 当時の東方の国マガダはナンダ朝末期であつて政治的に不安定であつたと思われるが、国力は強大であつたようで、ナンダ朝のどの時期を指しているかは分らないが、軍隊は騎兵二万、歩兵二〇万、戦車二千、戦象三千といわれ、最盛期のころとみても数は多すぎるであらうが、少なくともポロスの何倍もの兵力を擁すると考えられていて、西側の人々の目には想像を絶する国として映つていたのであらう。

### 三 西側の戦象

国力の指標は軍隊であり、その中心はインドにあつては戦象であつたようである。アリアノスの描くアレクサンドロスのインド遠征では多くの戦象との戦いが強調されている。戦いに勝利すればその国の戦象はすべて自分のものとなつた。獲得した戦象の多くを自ら引きつれて戦いを続けていく。インダス河下流域から西へ方向を転じ、アレクサンドロスは軍隊をペルシアへと向けるのであるが、そのときは戦象の一群を別の経路で同道させる。アレクサンドロスがバビロンに到着したとき多くの人々が出迎えた。彼の側近護衛官の一人であつたペウケスタスがペルシス太守を務めていたが、ペルシア人約二万人、その他のペルシス近辺の種族の者たち、その他の騎兵の部隊等々を引きつれて歓迎した。<sup>(24)</sup> そのなかにひととき偉容を放つて戦象部隊が加わつていたであらう。

アレクサンドロスの没後、帝国の覇権をめぐり、熾烈でしかもきわめて複雑な離合集散を繰り返す戦闘が後継者たちの間で繰り返ひろげられる。そのなかに戦象に関する記述がいくつか見られるので、戦闘の経過を追ひながら戦象の役割に注目してみたい。

アレクサンドロスの死後、側近護衛官の一人であつたペルディッカスが幼帝の摂政となり、同じく側近護衛官であつたプロトレマイオスを攻めるが、三二一年に殺されてしまう。エジプト太守のプロトレマイオスを中心として反ペルディッカス連合が結成されて<sup>(25)</sup>いた。彼の死後、最年長のアンティパトロスが本国マケドニアの代理統治者となる。彼はアレクサンドロスの父フィリップスの右腕であつたし、アレクサンドロスの時代には本国の総督であつた。彼は小アジアよりマケドニアに帰国するに際してアンティゴノスに自分の軍隊を譲り渡す。

アンティゴノスはアレクサンドロスの父と同年で、次の後継者と目されていた。その軍隊は歩兵八五〇〇、大規模な騎兵部隊、それに戦象七〇であった。<sup>(26)</sup>これが三二〇年頃であり、このころから強敵のエウメネスが対立することになる。エウメネスは父の代からフィリッポスと親しい関係にあり、アレクサンドロスの代になると書記長官を務め、アレクサンドロスの東征には自分の軍隊を率いて加わった。アレクサンドロスの死後、カッパドキアの太守となる。本国の政争に巻きこまれ、強力な騎兵部隊を率いるも、結局アンティゴノスに敗れ、処刑されてしまう。<sup>(27)</sup>三二一年頃から始まった二人の争いは三二六年のエウメネスの死まで続き、以後しばらくアンティゴノスの世界となる。

戦いの最初のころ、アンティゴノスはカッパドキアで三〇頭の戦象を使用したという。<sup>(28)</sup>このころのエウメネス側には戦象の言及はなく、騎兵が主な兵力であったようである。三一八年にはアンティゴノスはアジアで最強といわれたが、その陣容は歩兵六万、騎兵一万、戦象七〇であったという。<sup>(29)</sup>アンティパトロスから引きついだころより歩兵、騎兵ともに増強されているようであるが、戦象については変わりが無い。三一六年の最後の戦いではアンティゴノスの戦象六五に対してエウメネスの方は一二五、他の兵士等の軍勢も見劣りするわけではなかったが、仲間の將軍たちや銀盾兵と呼ばれるマケドニア以来の古参最強部隊の裏切りによって、エウメネス軍は崩壊してしまつた。<sup>(30)</sup>

エウメネスの側にインダス河北部周辺を支配していたエウダモスがついた。彼は三二五年にインド地方の太守ピリッポスが傭兵隊に殺されたとき、タキシレスとともに新たに太守が任命されるまでの仮の管理者としてアレクサンドロスより命を受けた。<sup>(31)</sup>ピリッポスのインド地方とはインダス河とアケシネス川との合流点を境に、属州インドの北半分を占める地域であつたといつたので、<sup>(32)</sup>タキシラからポロスの以前の領土にわたる全体を指しているであろう。この時点でのポロスの統治地域は本来の場所からインダス河に沿つて南へと拡大していた。



いわゆるインド地方の北半分は太守がピリッポスでタキシレスとポロスが実質的には支配していたのであろうか。この合流点から南半分はアゲノルの子ペイトン（アレクサンドロスの側近護衛官の一人、後にメディア太守となったペイトンとは別人）が太守に任命されている。<sup>(33)</sup>

仮の責任者の一人となつたエウダモスは三一八年にポロスを、その翌年にはもう一人の責任者タキシレスをも殺してこの地を去り、エウメネスの側に加わる。エウメネスが所有した一二五頭とはエウダモスがこのとき連れていったものである。<sup>(34)</sup> インド地方の南半分を支配していたペイトンは三一六年にそこを離れ西へと帰りアンティゴノスの陣営に加わる。アレクサンドロスのもとでの実績もあつたことから、アンティゴノスのもとでも要職を担つたようである。バビロン太守であつたセレウコスがアンティゴノスと反目しエジプトへ逃れたあと、その太守に任ぜられたり、アンティゴノスの息子デメトリオスとともにプトレマイオスを攻めたりしたといふ。三二二年にその戦いで亡くなる。<sup>(35)</sup> このペイトンが西へ帰るに際して象の話は出てこない。ペイトンは当時の現地の政治状況の変化により離れざるをえなかつたともいわれるので、エウダモスが發揮しえたような支配権は持ちえなかつたのであろう。三一六年アンティゴノスが勝利し、エウメネス、ともに戦つた象隊指揮官エウダモス、それにエウメネスを裏切つたということでアンティゴノスの怒りをつた銀盾兵の指揮官、そしてエウメネスによつてアラコシア太守を追われたシビュルティオスに代わつて太守となつていたケファロンなる人物が処刑された。<sup>(37)</sup>

最初エウメネスの陣営にいたペウケスタスとその友人であつたシビュルティオスはアンティゴノス側に加つたが、ペウケスタスはペルシア人の間でも評判が良すぎたため太守の任を解かれ、西の戦線へと、それ相應の待遇をもつて配属された。シビュルティオスはアラコシア太守に復帰した。このときシビュルティオスには銀盾兵一〇〇〇人が与えられた。<sup>(38)</sup> 銀盾兵とはマケドニア出身の古参の重装兵で、当時最強の部隊とい

われ総勢三〇〇〇人であつた。<sup>(39)</sup> プルタルコスによれば、「フィリッポス及びアレクサンドロスに仕えた老兵であつて、その時まで敵に負けたり屈したりしたことはない格闘士のように、多くのものは七十歳に達し六十歳以下のものは一人もいなかった」という頑強な面々であつた。それだけに御しがたく、アンティゴノスとしては裏切り行為もさることながら厄介者を追放する意味でも、シビュルティオスに辺境守備要員として与えたのであろう。このときアンティゴノスは「彼らを」あらゆる方法で弱らせ滅ぼして一人もマケドニアに戻らずギリシアの海を見ないようにしろ」とシビュルティオスに命じたという。<sup>(41)</sup> 残る二〇〇〇人は「隔絶された辺鄙な」メデア北東部の辺境の守備に回された。<sup>(42)</sup>

アンティゴノスは勝利したことによつて、当然、戦利品としてエウメネス側の戦象一二五頭を手にする事となり、以前からの手持ちの六五頭に加えて、死数を考慮してもおよそ一五〇〜一六〇頭はいたことにならう。三一六年以降しばらくの間、小競り合いはあちらこちらで勃発するが、象についての情報は知られない。

#### 四 ガザの戦い (三二二年) 以後

アンティゴノスはエウメネスとの戦いに勝利すると、アレクサンドロス帝国の西部から支配を次第に拡大し、メソポタミア、バビロン、メデア、スシアナ、ペルシアへと東部にまで及ぶ。しかしさらに東方のバクトリア、カルマニアでは前任の太守を留任させ、アラコシアは前任のシビュルティオスを復帰させて以前からの支配体制を維持していく方策をとり、実質的支配を彼らに委ねることにした。<sup>(43)</sup> したがつてこれらの州は半独立的に存続することになり、アンティゴノスは西部の支配強化に専念することになる。

三二二年、エジプト太守プトレマイオスとアンティゴノスの息子デメトリオスとがシリア南部、エジプト国

境近くのがザで戦う。このときプトレマイオス側には戦象はいなかったが、デメトリオス側には四三頭いたという。<sup>(44)</sup> プトレマイオスに身を寄せていたセレウコスもともに戦うが、両者ともアレクサンドロスのもとでの象との戦闘に慣れていた。特にセレウコスはポロスとの戦いで二〇〇頭の戦象を相手にした経験があった。<sup>(45)</sup>

三二一年、この戦いに勝ってセレウコスはプトレマイオスから歩兵八〇〇、馬二〇〇を譲りうけバビロンへと向かう。バビロンの太守ペイトンはこの戦いでデメトリオスに味方して戦死していた。セレウコスはすでに三二一年にはスシアナを手中に収め、三二〇年にはメディアを攻めて地歩を固めることができた。<sup>(46)</sup> 三〇九年、最終的にバビロンの再支配を確立し、その後、自らバクトリア、カルマニアさらにインドへと進攻したと話は続くのであるが、このころから三〇二年に始まるアンティゴノス・デメトリオス対プトレマイオス・セレウコス・リュシマコス・カッサンドロス（アンティパトロスの息子、のちのマケドニア王）連合軍との決戦にいたるまでの間、セレウコスはバビロンを中心として帝国東部の、アンティゴノスはシリア方面を中心として帝国西部の経営に意を注ぐ。<sup>(47)</sup> その一環として三〇六年にアンティゴノスはエジプトに進攻する。歩兵八万、騎兵八千、息子のデメトリオスは一五〇隻の艦隊を指揮し、総力を挙げての攻撃で、このときには八三頭の戦象が加わっていた。<sup>(48)</sup> この戦いも反アンティゴノス勢力はプトレマイオス、リュシマコス、カッサンドロスの同盟軍で、まもなくセレウコスも加わり、三〇二年まで両陣営の攻防が繰り返りひろげられた。この間、三〇六年から三〇五年にかけて、アレクサンドロスの帝国の分割されたそれぞれの領土を基盤として彼らは国家を建設し、国王を名乗るようになる。デメトリオスもその一人であったが、彼は自分と父アンティゴノス以外の者を王と呼ぶ者を嘲笑して、自分の宴席での戯れに、自分を王、セレウコス（シリア王）を象隊長、プトレマイオス（エジプト王）を提督、リュシマコス（トラキア王）を大蔵卿などと呼ばせて喜んでいたという。<sup>(50)</sup> セレウコスが王を称するのが三〇五年であるので、この時点ではすでに他の誰よりも多くの戦象を保有していたということであろうか。

三〇一年、アンティゴノス・デメトリオス対セレウコス・リュシマコスの最終決戦が小アジアのイブソスで幕を開ける。そのときの軍勢はアンティゴノス側の歩兵七万、騎兵一万、戦象七五に対し、セレウコス側は歩兵六万四千、騎兵は敵側より多く、戦象は少なくとも四〇〇頭戦場に投入できたという。<sup>(51)</sup>アンティゴノス側の象の総数はアンティパトロスより受けついだ七〇頭をずっと維持していたのに比べ、セレウコス側は決戦前年の三〇二年の越冬中には四八〇頭いたといわれ、<sup>(52)</sup>この急激な増加は、やはりインド進攻時にチャンドラグプタから五〇〇頭が贈られたという伝承の正しさを裏づけるようである。この戦いでアンティゴノスは戦死し、デメトリオスはギリシアへと逃れその地の支配者となる。プトレマイオスはエジプト、リュシマコスはトラキア、セレウコスはバビロンを中心として西はシリアから東はアラコシアまでという版図が確定した。

## 五 シビュルティオスの動向

シビュルティオスはセレウコス、チャンドラグプタ、メガステネースを結びつける重要な位置に立つ人物である。すでに述べたように、三二五年アレクサンドロスによってアラコシア太守に任ぜられ、エウメネスによって三二一年にその座を追われる。シビュルティオスがパウケスタスとともにエウメネス側についていたが、エウメネスの不信をかい、危ういところを逃げ出すことができ、当然対立していたアンティゴノスの陣営に入り、三二六年のアンティゴノスの勝利によってアラコシア太守に復帰する。しかしその間の五年の詳しい行動はよく分らない。追われる前の四年間太守であったとき、アラコシアの南隣のゲドロシアの太守も兼ねていたので、部下に多くの将軍たちもいたであろう。この二州は南北にわたってインダス河流域のいわゆる属州インドと境を接する地域であり、属州インドの北部ではエウダモスが、南部ではペイトンが西へ帰り戦闘に参加するとい

う混乱した状況で、將軍たちも自らの運命をどちらかに賭けざるをえなくなっていたであろう。そこでのシビュルティオスの役割は決して小さくはなかったと思われる。アラコシア、ゲドロシアに政治的空白が生じるとすれば、北部ではタキシレスやポロスの後継者たちが、南部では土着のインド勢力が西に押し出していることにもなる。アンティゴノスと手を結ぶことに将来の復権を賭けたのであろうか。反エウメネス勢力を結集し、他方では東方のインドの動向にも注意を払うという五年間であつたらうか。太守に復帰したときのこと、彼はペルセポリスでアンティゴノスと呼ばれ復帰を認められたという話は、<sup>(53)</sup>彼の行動の広さの一端を語っているのであろうか。

シビュルティオスとセレウコスとの関係については、それを示す直接的な資料はないようである。シビュルティオスについてはアリアノス『東征記』に、三二五年の時点で「アレクサンドロスからカルマニア太守に任命されたばかり」であつたが、「今またアラコタイ人とガドロシオイ人に対する統治権をも与えられた」といい、「カルマニアの方は別に、ピュトパネスの子トレポレモスが引き受けることになつた」といい、アラコシア、ゲドロシアの太守を引きつぐことになつた。<sup>(54)</sup>『東征記』にはもう一箇所メガステネスが「アラコシアの太守シビュルティオスと生活をともにした人」として出てくるが、セレウコスとの関係には触れられていない。<sup>(55)</sup>シビュルティオスがあるときまでアレクサンドロスに同道していたのであれば、セレウコスとはともに上級将校であつたらうし年齢も近かつたと思われるので、面識があつたとしても不思議ではない。

三二六年、太守に復帰してアラコシアに向かつたであろうが、その年にはともにアンティゴノスのもとにいたセレウコスが身の危険を感じて、プトレマイオスを頼つてエジプトへ逃れる。またシビュルティオスが支援していたペウケスタスもその後、体よく本拠地のペルシスから西の戦線へと派遣されてしまう。三二二年にセレウコスがバビロンに帰還し、三〇五年に王を称するまで、シビュルティオスはアラコシアで約六年間ほとん

ど独立的太守として、西からの干渉を受けることなく統治しえたと思われる。<sup>(56)</sup> バクトリアもやはり独立的に存在していて、パンジヤブ地方はチャンドラグプタが少なくともこの時期には制圧していたようであるから、境を接するシビュルティオスとしては特にインドとの外交が最重要課題となっていたであろう。<sup>(57)</sup> 筆者はセレウコスによるインド進攻は実質的にはなかつたという見解に立つのであるが、<sup>(358)</sup>ここでシビュルティオスによる交渉が重要な役割を果たしたと考えることにより、一層その感を強くする。

チャンドラグプタから贈られた象五〇〇頭とは、アレクサンドロスと戦ったポロスが全盛期のときに所有した二〇〇頭から判断すると、タキシラ、パンジヤブ地方のみならず、より広い地域から集められたものであろう。セレウコスがインドと交渉した最大の目的はこの五〇〇頭を獲得することであつたと考えざるをえない。

三二二年、セレウコスはガザでデメトリオスの象四三頭と戦つた。勝利したのは以前にポロスの戦象二〇〇頭と戦つた経験があつたからであつた。これによつてセレウコスは戦象の威力を再認識したのであろう。この五〇〇頭とは将来のアンティゴノスとの戦いを見据えたうえでの兵力増強であつたろう。インドとの交渉は、三〇八年アンティゴノスとの停戦が成立してから三〇一年のイブソスの戦いまでの間とならうが、そのなかで年代がはつきりしているのはセレウコスが王を称したとされる三〇五年である。前にも出たように、デメトリオスはシリア王セレウコスを象隊長と擲擧していた。したがつてセレウコスとの交渉が行われたのは三〇七、三〇六年とも考えられる。

## 六 メガステネースの政治的位置

この交渉にメガステネースの登場する可能性はあろうか。以下に A.B. Bosworth (ボズワース) の見解を参照

しながら、メガステネース、セレウコス、シビュルティオスの関係に注目してみたい。まずここで再度メガステネースに関する言説を検討したい。

## 1 二世紀、アリアノスの言

「メガステネースはアラコシアの太守シビュルティオスと生活をともにした」

「インド人の王サンドラコトスのもとにしばしば訪れたことをみずから語っている」<sup>(60)</sup>

「彼はインド人の大王サンドラコトス——ポロスよりは偉大なこの王の側近にあつたとみずから語っている」<sup>(61)</sup>

## 2 二〜三世紀、クレメンスの言

「インドに関する書物の作者でセレウコスと生活をともにした (lived with)」<sup>(62)</sup>

「メガステネースはセレウコスと親交のあつた (associated with) 歴史家」<sup>(63)</sup>

アリアノスの引用の文脈をみると、「シビュルティオスと生活をともにした人」であるからインドの地理についての言葉は信頼できるとして、ガンジス川、インダス河の比類なき巨大さを、またインドは広大な平野でできていることを書き記している。「サンドラコトスのもとにしばしば訪れた」と「偉大なこの王の側近にあつた」は、前者はパータリプトラ滞在中の出来事として読めるし、したがって都周辺の情報については信が置けるとの意味であり、後者は、側近にあつたのであるから、インドの大方の地方については踏破したわけではなく、したがって、その情報もすべてが正しいというわけではないとの文脈で述べられているが、その趣旨は宮廷との緊密な関係を語っている点では同じである。

一方クレメンスの言の文脈は、シリアのユダヤ民族の哲学はギリシアやインドのバラモンのそれに匹敵するとのメガステネースの文章を引用して述べられていて、それゆえシリア王セレウコスとメガステネースの関係

が特に言及されたのであろう。クレメンスのこの言に対する注を見ると、ボズワースはメガステネースとセレウコスの關係を、しばしば顔を合わせることもある近い間柄というニュアンスで理解しているようである。<sup>(64)</sup>

ボズワースは、メガステネースとセレウコスとの關係を示す記述はこれのみで、しかも使節についての言及はないので、メガステネースがセレウコスの宮廷にいたとしてもセレウコスの大使とはならなかったという見解である。<sup>(65)</sup> ボズワースの論考の出発点は、アリアノスの先に出た文「サンドラコトス——ポロスよりは偉大なこの王」は原文「メガステネースが語るには、インド人の最大の王サンドラコトスに会った。またポロスにも会った。彼はより偉大であった」を修正した読みであり、<sup>(66)</sup> 原文通りに読むべきとする点にある。そうであれば、メガステネースがポロスを訪れたのは彼が殺される三二八年以前であり、セレウコスはアンティゴノスの陣営で戦っていた時期（三二二〜三二六年）となる。エウダモスがポロスを殺した背景には彼が味方をしたエウメネスが象を必要としていた状況があったと述べているが、確かに一二〇頭を連れていったのであるから、当然そう考えられよう。ここにシビュルティオスが交渉役として、メガステネースがその補助役として登場するのも大いにありうるとする。<sup>(67)</sup> そしてさらに象が懸案であったとすれば、さらに東方のインドの王国までも視野に入れて使節を送るのは、援助を求めらううえでも、またその国内を巡察したり良好な外交關係を構築するには絶好な時期であるので、メガステネースを使節としてパトリプロに派遣したとし、その年代を三一九／一八年頃と設定している。<sup>(68)</sup> しかしシビュルティオスは三二一年に太守の座を追われているので、このときは反エウメネスであったはずで、彼がどういいう立場で行動したのか理解できない。

象が懸案となっていたとされる時期、つまり三一九／一八年頃とは先に述べたように、アンティゴノスが七〇頭の象を引きつぎ、エウメネスとの戦いにカップディアで三〇頭使用したという時期である。これ以外に象についての話は出ない。シビュルティオスとインド側との交渉があったとすれば、象に関する何らかの情報



が出てきていたのではないか。ペイトンが属州インド南部から離れるときでも象には何も触れられてはいない。もしシビュルティオスが交渉役を担ったとしても何の成果も出ず、大使を送ったとしてもなんの利益もなかったことになる。

### まとめ

やはり戦象の重要性が再認識され強調されるようになるのはセレウコスによつてではなからうか。三〇九年バビロンの支配を確かにしたあとアンティゴノスとの小競り合いは続くが、この時点でも大規模な戦象隊を組織する必要性はなかつたのであろう。

こう考えると、やはり象五〇〇頭の意味は大きい。アンティゴノス側にはおよそ一五〇頭がいる。将来のアンティゴノスとの決戦を見据えて、それ以上の象の頭数を見積もつたであらう。ここがシビュルティオスが活躍するに一番相応しいときであつたように思われる。シビュルティオスと手を組んで、この目的のため、バクトリア、インドへと軍を進めた。このときメガステネスが交渉の中心にいたとも推測できる。アリアノスの言葉「インド人の王サンドラコツトスのもとにもしばしば訪れた」をこのとおり読んで、インド側との交渉ぶりを想定するのも可能であらう。そうであればメガステネスのインド訪問は三〇七／三〇六年頃となる。

和議が成立してセレウコスは五〇〇頭を手にしバビロンへ帰る。三〇五年王を称するが、そのときは象隊長とあだ名されるほどであつた。そして三〇一年の決戦に向けて準備を進めていた。こういう状況を考慮すれば、もしメガステネスがこの和議に加わつたとしても、これとは別の機会に、やや遅れて改めてインドへ公式に大使として訪れたと考える方が妥当であるように思われる。

メガステネースは何年間かをインドで過ごしたとされる。三一九／三二八年の火急の時期、あるいは三〇七／三〇六年のインド側との交渉の時期に何年間かをパータリプトラで過ごすゆとりがあったであろうか。メガステネース『インド誌』の断片のみからではあるが、当時の緊迫する政治情勢は読みとれないのである。

ボズワースの見解のもう一つの大きな論拠は、メガステネースが多数の自治国とチャンドドラグプタの王国との並存を記している点で、チャンドドラグプタがまだ圧倒的支配力をもたず、西部でのアレクサンドロス死後の混乱した政治状況を反映しているとみなしている。しかしマウリア帝国内における大都市はこれ以後においても、王から任命された副王、知事などによって統治されるものの半独立的で、以前からの統治形態を踏襲しているようでもあり、多数の自治国の存在をいちがいに小国分立状態とみなすこともできないであろう。この問題は本稿の考察の範囲を超えるので、ここではただ指摘するに止めることにしたい。

☆ 前論文「大使メガステネース派遣前史」で、人名エウメネスをエメネウスと誤表記した。訂正する。またエウダモスをエウデモスと表記したが、エウダモスに統一する。

註

- (1) 『豊山学報』第六五号、二〇二二年。
- (2) 『ユダヤ思想Ⅰ』（岩波講座、東洋思想、第一巻）、岩波書店、一九八八年、一六三、一九二頁。
- (3) 『インド誌』はアツリアノス著、大牟田章訳『アレクサンドロス大王東征記』（上下）、岩波文庫、二〇〇一年に付属し、その一部となっている。以下『インド誌』を含めて『東征記』と略す。
- (4) 『東征記』下、四六八頁（訳註）。
- (5) ヘロドトス『歴史』下（松平千秋訳）、岩波文庫、一九七一年、三七二頁（解説）。

- (6) 阿部拓児訳『ペルシア史／インド誌』（西洋古典叢書二〇一八）、京都大学学術出版会、二〇一九年、三二三頁（解説）。
  - (7) R. Jain (ed.) : *McCridle's Ancient India as described by Megasthenes & Arrian*, New Delhi 1972, p.14.
  - (8) R.C. Majumdar: *The Classical Accounts of India*, Calcutta 1981, p.98.
  - (9) *Ibid.*, p.188.
  - (10) 河野与一訳『プルターク英雄伝』（九）、岩波文庫、一九五六年、八七―八八頁。
  - (11) 『東征記』下、三二頁。
  - (12) 同前、一三九頁。
  - (13) Majumdar, *op.cit.*, p.341.
  - (14) 『東征記』下、一三九―一四四頁。
  - (15) Majumdar, *op.cit.*, p.439.
  - (16) Jain, *op.cit.*, p.15-16.
  - (17) 『東征記』下、一三九頁。
  - (18) Majumdar, *op.cit.*, p.218.
  - (19) Jain, *op.cit.*, p.15.
  - (20) 『東征記』下、五〇頁。
  - (21) 同前、七三―七四頁。
  - (22) 同前、三三三頁（訳註）。
  - (23) 中村元『インド史Ⅰ』、中村元選集「決定版」第五巻、春秋社、一九九七年、四〇七頁。
  - (24) 『東征記』下、二二五頁。
  - (25) 同前、三七八頁（訳註）。
- (26) R.A. Billows: *Antigonos the One-Eyed and the Creation of the Hellenistic State*, University of California Press 1990, p.72.

- (27) 『プルターク英雄伝』(八)、四〇―四三、五一頁。
- (28) *Billows, op.cit.*, p.75.
- (29) *Ibid.*, p.80.
- (30) 『プルターク英雄伝』(八)、六四頁。
- (31) 『東征記』下、一四五頁。
- (32) 同前、三五六頁(訳註)。
- (33) 同前、一九―二二〇頁。
- (34) *Billows, op.cit.*, p.90.
- (35) *Ibid.*, p.415-6.
- (36) *Ibid.*, p.415.
- (37) *Ibid.*, p.103.
- (38) *Ibid.*, p.433.
- (39) *Ibid.*, p.95.
- (40) 『プルターク英雄伝』(八)、六三頁。
- (41) 同前、六六頁。
- (42) *Billows, op.cit.*, p.300.
- (43) *Ibid.*, p.240, 251.
- (44) *Ibid.*, p.125.
- (45) *Ibid.*, p.127. その戦いぶりについては『東征記』下、五〇―五五頁に詳しい。
- (46) *Ibid.*, p.129, 139, 141.
- (47) *Ibid.*, p.146.
- (48) *Ibid.*, p.162, 353.

- (49) Ibid, p.174.
- (50) 『フルターク英雄伝』(一一)三三五頁。
- (51) Billows, op.cit., p.182.
- (52) Ibid., p.178-9.
- (53) Ibid, p.105.
- (54) 『東征記』下、一四五頁。
- (55) 同前、三二頁。
- (56) Billows, op.cit., p.240.
- (57) 『東征記』下、三三四頁(訳註)。
- (58) 拙論「大使メガステネス派遣前史」、特に二七一―二八頁参照。
- (59) A.B. Bosworth: *The Historical Setting of Megasthenes' Indica* (Classical Philology, vol. 91, No.2, 1996), The University of Chicago Press.
- (60) 『東征記』下、三二頁。
- (61) 同前、二二九頁。
- (62) Majumdar: op.cit., p.439 (の英訳より)。
- (63) Bosworth: op.cit., p.114 (の英訳より)。
- (64) Ibid, p.114.
- (65) Ibid., p.114.
- (66) Ibid, p.114.Jain, op.cit., p.15. Majumdar, op.cit., p.218.
- (67) Bosworth, ibid, p.120.
- (68) Ibid, p.120.
- (69) R.K. Mookerji: *Chandragupta Maurya and His Times*, Delhi 1966, p.53.